

成人と話すには

—大衆と話のこつ—

高島 米峰

一 演壇に立つて言譯するな

演壇に立つて、いきなり、色々と言譯をする人がありますが、あれは、あんまり宜いものではないと思ふのであります。例へば、「どうも非常に忙しくて、材料を集めることが出来なかつたから」とか、「何分多忙の爲に考を纏めることが出来なかつたから」と云ふやうなことを、如何にも、したり顔に言譯をする人がありますけれども、是は聞いて居る人を、輕蔑したことに成り、又、自分の話に對して、自分で權威を抛棄することにもなるのであつて、そんな不用意の話なら、人の前でしなければいゝぢやないかと、斯う言はれると、一言もなくなつてしまふのであります。又、「昨日は座談會があつた、一昨日も講演をやつた、昨夜も晩くなつた、その爲に、すつかり咽喉を痛めました。」などと言ふやうな、言譯をする人もある。成程その人は、毎日喋べつて居る爲に、咽喉を痛めて居つて、而も、どうしても何かそこで大言しなければならぬ立場に立つて居るのかも知れないけれども、如何にも自分は人氣役者であつてさう云ふことの爲に忙しいと云ふことの、自己宣傳を加味したやうに取られて、さう云ふ言譯の仕方は甚だ宜くない。

い、聴衆に、決して好い感じを與へるものではない。私も、實は、さう云ふ譯で咽喉を痛めて居るのですが、決して言譯なんかしません。と、斯う言つて言譯をして居るのであります。(笑聲)是が話のこつであります。こんな工合に言譯をすると、ちつとも耳立たぬでせう。(笑聲)それは、成程、風邪を引いて、すっかり咽喉が潰れて居ると云ふ場合には、何とか言譯をしなければ、聴衆の方でも、あの人、變な病氣でもあるのぢやないかと云ふやうな、心配をする人もありませうから、「御聴き苦しいでございませうが」と云ふ位の言譯は、當然あるべきであつて、それは決して、聴衆を不快な感じに導く虞れはないものだと思ひます。

此の間も、或る友人の追悼會がありまして、比較的親しい者ばかり集つたのであります。その席上で、集つた人々の中で、特に親しかつたと云ふやうな人が、亡くなつた友人の追憶談をすると云ふことで、内々打合せをして置いたのであります。所が、「何々君に、故人の追憶談を願ひます」と云ふ紹介を致しますと、その人は立ち上つて、「只今突然の御指名に預りまして、非常に當惑するのであります」とやつたのであります。而も、それから、その人は、どうするかと見て居ると、ポケットから、相當紙數のある原稿を出して、それを擴げて、さうして約四十分間もやり出した。一體「突然の御指名」で、あれだけの原稿を、何處でどうして用意したもののかと、洵に驚きました。(笑聲)あゝ云ふやうなことは、本人はたゞ月並の儀禮のように、ツイ、不用意の間に言つてしまつたのかも知れないが聽いて居る者から見ると、實に堪らないやうな氣がする。氣轉を利かせ損なつて、こんな工合にやると、是は明かに嘘になつてしまつて、直ぐに、人に尻尾を抑へられると云ふやうなことになるのであります。さう云ふやうなことを能くテーブルスピーチなんかでも言ふのであります。所が、今言ふ通り、大抵、内々打合せをするのであります。是は是非あなたに、この所は是非君にとちやんと打合せをして、それは困るがと言ひながら、ちやんと、さう言はれた

時には、斯うと云ふ心構へをして居る譯なのであります。それなのに、いざ指名されると、「突然の御指名で」と斯うやる。けれども樂屋を知つて居る者の身になると、可笑しくつて仕様がなない。さう云ふ時には、正直に話をすべきであつて、何も「突然の御指名」なんと云ふことを言はなくても宜い。内交渉が済んで居るのに「突然の御指名で」と云ふやうなことを言ふのは、自分の話の下手なのを、「突然の御指名」に責任を轉嫁しようと思ふやうな態度で、是は宜くないと思ふのであります。尤も、實際、突然指名される場合も、可なり多いのでありますから、「突然の御指名」が悉くインチキだとばかりは言へません。

さう云ふやうな譯で、演壇に立つて、いきなり言譯をするのは、宜くないことだと思ふのであります。私は、その宜くないことを、一つ二つ言はなければなりません。それは、時間割を見ますと、私の題は、「大衆と話のこつ」となつて居るのであります。是は實は、こんなやうな題は、文部省の方から與へられたものでありまして、私の方で申上げた譯ではないのであります。私の方では「成人と話すには」と云つたやうなことで、して見ようかと思つて居るのであります。同じやうなことであります。話のこつ」と言はれると、如何にも「話のこつ」を心得て居るやうに思はれて、私としては、荷が重いのであります。さう云ふ特別の技巧とか體驗とか云ふやうなことを織込んで、話をしなければならぬやうな題を與へられたことは、私としては甚だその人を得て居ないと云ふやうな心持が致しまして、「成人と話すには」と云ふやうなことに、題を改めて頂きたいと云ふことを、申して置いたのであります。青少年の方は、岸邊、久留島、加藤の三講師が擔當するのであります。私は成人と云ふ側を受持てば宜いと云ふやうに、心得て居たのであります。所が斯う云ふやうな題になつて居りまして、如何にも「話のこつ」を心得て居るやうに取られてしまふと云ふことは、是は私としては、その任でないのであります。唯斯う云ふことを斷はつて御話をするのは、

お前の權威を無くするではないかと思はれるかも知れませぬが、もと／＼權威は無いのでありますから、無くする心遣ひはありません。權威があつてこそ、始めて無くすると云ふこともあるのでありますが、全然無いものは、無くなる筈はありません。ですから遠慮なく、此處で言譯をさせて頂くのであります。

もう一つは、私は、昨年の講習會の時も、三時間お話ししたものですから、今年も三時間だらうと思つて居りましたが、二時間だといふので、私の用意したことが、三分の一無駄になる。是は私としては甚だ心外であるし、あなた方も極めて御不満足でありませう。昨年三時間やつた筋書が是だけある、所が、今年用意したのは、それより少し紙數が多いのであります。けれども、三時間でこなす積りで、是だけ用意して來て居るのであります。それが二時間と云ふことであるから、どうしても三分の一を割愛しなければならぬと云ふことになる。それで、仕方がないから、今日は一番良い所は残して置いて、粗末な所だけお話をして、あとは來年のお楽しみと云ふやうなことにして置きたいと斯う考へるのであります。(笑聲)

二 話せばわかる時代

一體吾々は、話、話と言ひますが、話にも色々あると云ふやうなことは、已にあなた方も御承知の通りであります。第一、話すことの出来ない時代があつた。即ち人間が、漸く二本足で歩くやうになつた時代を考へて見ると、この時代は、話すことが出来なかつたらうと思ふ。出来ても、極めて簡單なものであつて、犬がワン／＼、猫がニャンニャンやると云ふやうな程度の話、——あれを話と言ふかどうかと云ふことは問題であります。兎に角、音を出して、さうして、自分の意思を表示すると云ふ程度の所から始まつて來たのであつて、さう云ふ時分には、先づ話が出

來なかつた。斯う片付けて置いた方が宜いぢやないかと思ふのであります。けれども、何かしら意思表示をしたに違ひないのであります。その意思表示は、どう云ふことでやつたかと云ふと、是は先づ身振りとか表情とか云ふことでやるより仕様がなかつたと思ふ。もう癪に障つて堪らぬと云ふ時には、食ひつくやうな猛烈な表情、身振り或は手を舉げて殴る、足を舉げて蹴ると云ふやうなこと、さう云ふことで以て、意思表示をした時代が相當長かつたんじゃないかと考へられる。さうして、文字と云ふものが出来る前に言葉と云ふものがあつたのであります。しかし、自分の言葉を聽かせようと思つても、聽き手が近くに居ない場合、或は自分の考を、後々までも残して置きたいといふ場合、それを何かに記して置かなければならぬのであります。そこでまあ文字と云ふやうなものも、發明された譯であります。その文字の發明は、東洋で言ふならば、支那に於ける象形文字であつて、物の形をその儘現はしたやうな文字を以て傳へる。兎に角、吾々の先祖の或時代には、話の出来なかつたと云ふ時代があつたと云ふことを、考へる必要がありません。

それから、今度は話をしても分らない世界と云ふものがある。——是は今でもさうであります。例へば、獨逸語を全然知らない者に、獨逸語で話をしても分らない。又日本語を知らない獨逸人に向つて、幾ら日本語で話しかけても向ふはちつとも分つて呉れない。言葉の相違からして、こちらの意思の疏通の出来ない者もあるが、同じ國に住んで居つても話して分らない者もある。言葉を知らない者に對しては、話をしたつて分らないのであります。是は原始生活をやつて居る時分には、お互ひに話をしても分らなかつたのであるし、今日文化の進んだ世の中でも、言葉の相違、或は言葉を知らないと云ふ爲に、話をしても分らない相手がある。斯う云ふやうなことも、吾々は、やはり考へて置かなければならぬことだと思ふのであります。

今の時代は、どう云ふ時代であるかと言へば、言語が發達して居つて、文章が書いて、讀めて、世界の何處の國の言葉も、勉強さへすれば分ると云ふ、良い時代になつて居つて、お互ひ、同じ國民同士の間では、その國の國語を用ひさへすれば、「話せば分る」と云ふ時代になつて來て居るのであります。是は洵に恵まれた世界にまで到達したものだとお互ひに喜ばなければならぬのであります。その「話せば分る」と云ふ時代に、「問答無用」と言つて、一發のピストルの下に、一國の宰相が倒されたといふ、不思議な事件のあることを、吾々は又見逃すことが出來ないのであります。「話せば分る」時代で、話せば意思の疏通が得られる世の中に、話す必要がないと言つて、いきなりピストルを向けて打つと云ふやうなことが、この開明の世の中に、白晝堂々として行はれたと云ふことは、一體どう云ふことか。どう云ふことかと云ふことに對して、私が解答しようと云ふのではない、お互にさう云ふ不思議なこともあるものと云ふことを、忘れてはならぬと云ふことを申上げるのであります。話せば分る、話せば分る、話す武器があるのであるから、話以外の武器に依つて、事を解決しようと云ふことを考へてはならぬのだ。けれども、俺は話下手だから、話よりその方が早いと言ふ人があるならば、さう云ふ人こそ此の講習會へ出席して話術の稽古をする必要のある人だといふことになります。

三 話さなくともわかる世界

所で、話せない時代、話しても分らない時代、話せば分る時代、それでお終ひか。今の状態では是で行止まるのか、或は更に進んで、今度は話さなくても分る時代と云ふものがあり得るか。さあ、さう云ふ時代が世界的に來るかどうかと云ふことは分りませぬが、特殊な場合を考へると、話さなくても分る世界が、今でもあり得る。昔もあつた。そ

れは二千五百年程前に、印度に生れたお釋迦様に、或時一人の信者が金波羅華と云ふ花を捧げて、どうか此の金波羅華を題にして、御説法をして下さいと頼んだ。さうすると、お釋迦様は、快くそれを御承諾になつたので、澤山の聽衆は、固唾を呑んで、何か是から大説法が始まるだらうと豫期しつゝ待つて居りますと、一向御説法が始まらぬ。唯黙つて金波羅華を斯うやつて捻つていらつしやる。満場の聽衆は、聲の如く、啞の如く、何が始まるのかと、ボンヤリとして眺めて居る。その中で迦葉尊者一人、お釋迦様の顔を見て居つたが、ニッコリ笑つた。この澤山の聽衆の中で、唯一人、話さなくても分つた人があつた。そこでお釋迦様は、この迦葉尊者に向つて「吾ニ正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙ノ法門アリ、摩訶迦葉ニ付屬ス」と斯う仰しやつて、このお説法が終つてしまつた。是は心を以て心を傳へる、即ち禪宗で言ふ以心傳心とか、不立文字とか、教外別傳とかいふのでありまして、此の境地になりますと、話さなくても分るのであります。ちつと顔を見ただけで分つてしまふ。斯う云ふやうな世界が、若し吾々の世界に展開して参りますならば、どんなにか便利なものであらうと思ふ。顔を見ただけで、ちやんと相手の氣持が分つてしまふ。是も考へて見ると、お釋迦様と迦葉の間ばかりでない。吾々の間にもあると思ふ。例へば戀人同志の若い男女なんかは、會つてお互ひにニッコリ笑つちまへば(笑聲)もうそれで心の底から底まで分つてしまふと云ふのは、是は話さなくても分る世界だと言へないでせうか。「心あれば眼も口ほどに物を言ひ」なまじつかも、など言はない方が徹底する。「言はぬは言ふにいやまさる」とか、「泣かぬ聲が身を焦す」とか、皆是れ、話さなくともわかる世界の有様ではないでせうか。又母親が、赤ん坊に對する態度の如きもさうです、赤ん坊は、ものを言ひませぬ、話せない。けれども、赤ん坊の心持が、實に底の底まで能く分る、お腹が空いたのだと添乳をする、おしつこが出たんだと思へばおしつこをさせる、眠いのだらうと思へば寝せて呉れる。子供は決して、さう云ふことを言はないのだが、母親は、

子供の動くまにまに、能く推察致しまして、ちやんと子供の要求を満足させてやる。是も即ち話さなくても分る世界が、顕現して居るのぢやないか。即ち、全愛を傾けて相對する場合、そこは即ち、話さなくともわかる世界であります。夫婦の間でも、本當に愛し合つて居る夫婦であるならば、妻は夫の心持が能く分り、夫は妻の心持が能く分る。例へば、今日などでも、私は九時には此處へ來るのであるから、八時半には迎へが來る。斯う云ふことになりまずと八時半にならない前に羽織袴がちやんと用意されて居つて、さあと言へば肩へ引掛けさせて呉れる。それが九時には行かなければならぬのだから、袴を出せ、羽織を出せと、一々話さなければならぬと云ふ細君であつては、うるさくつて堪らない。所が前の日にでも、ちやんと、カレンダーか手帳か何か見て置くか、或は、前以て夫が何日にはどう云ふやうなことがあると云ふやうなことを話して置くことになれば、その日になつて、もう一遍それを繰返さなくても、響の聲に應ずる如く、やつて呉れると云ふやうなこともあり得る譯であります。さう云ふことは、前以て豫告をして置くから出來るのだが、豫告なしにでも、何か出來るのぢやないか。例へば、晩に歸りますと、夕飯はどう云ふお惣菜にして置きますかと云ふやうなことを、細君が夫に一々聞かなくても、妻は、今の時候には、斯うく云ふ物がある、この中で、夫は斯う云ふ物が好きなんだと云ふ、その夫の喜びさうな料理をして待構へて置いて呉れる、御膳に向ひますと、自分の好きな物が並んで居ると云ふやうなことで、さう云ふやうなことは、話さなくても分る。それを一々話さなければならぬやうな家庭生活であつた日には大變だ。朝は何にしませうか、晝には何にしませう、晩は何にしませうかと、一々相談をして拵へて貰ふと云ふやうなことでは、家庭に居るより、下宿屋に居る方が氣樂だ、公設食堂に行く方が更に便利だ、此くの如く、夫婦の間なんぞ、大體、話さなくても宜い世界であつて欲しいと思ふのであります。是は夫婦の心掛に依つては、可能なものだと思ふのであります。本當に全愛を以て接する所、そ

こには、必ずしも、話すと言ふ必要がなくて、用事が辨じ得られるものではないか。本當に親しい友達同士が會ふと「ヤー」「ウン」。それでもう話が濟んでしまふ。何を言つて居るのか分らない。が當人達はそれで分つてしまふ。友達と云ふ愛の力が、さう云ふ不思議な働きをなすのだ、是は吾々の理想郷であります。普通の場合に於て、他人と他人と接觸する時とか、大衆とか成人とか、青年とか云ふ者を前に置いて、たゞ黙つて居つたのでは、それは相手が分つて呉れない。是は何故かと云ふと、例へば、私とあなた方との間は、ちつとも親しくない。初めて御目に掛つて居る。どう云ふ氣持の人がそこに居るのやら分らぬ。だから何とかかんとか言はなければ、あなた方は分つて呉れない。に決つて居る。話したつて分つて呉れぬ人があるかも知れませぬけれども、(笑聲)兎に角、話さなければ分らない。そこに話法の研究と云ふ必要が起つて来る。即ち話をして、氣持よく分つて呉れるか、幾ら聽いても分らないと言つて拗ねてしまふか、折角話するのであるから、能く分るやうに、朗かな氣持で受入れられるやうな話し方をしなければならぬ。そこに話法と云ふものゝ必要があるのだ。話さなくても分る世界と云ふやうなことに就いては、維摩經と云ふお經がありますが、維摩居士が病氣の時、澤山な佛弟子の菩薩方が見舞に出かけて、維摩といろ／＼な問答をする、淨穢不二とか、動靜不二とか、善惡不二とか、罪福不二とか、生死涅槃不二とかいふ問答をやつて、最後に文殊菩薩が、維摩居士に向つて、「我々は皆不二を説いた、今度は居士の不二法門に入るの所見を聴きたい。」と申しますと「時に維摩默然として聲なし」とありまして、これ即ち「維摩の一點その聲雷の如し」と言はれるところなのですが、ここで文殊菩薩は、「善哉々々、文字言語あることなし、これ眞に不二の法門に入る。」と感嘆したのであります。この維摩と文殊の世界が、即ち話さなくてもわかる世界であつたと言へませう。かうなると、誠に「沈黙は金なり」で、お互に喋ることなんか浮き身をやつして居るといふのは、あんまり賢明ではないといふことになる。「雄辯は銀な

り」しかし、だからと言つて、この講習會が、無意義だといふではありません。

四 國 語 尊 重

そこで、日本人の用ひて居る言葉でありますが、この言葉と云ふものは、どうも不完全なものであつて、甚だ遺憾に思ふのであります。日本の言葉は、今日では、支那の言葉、即ち漢語が、澤山織り込まれて居りまして、本當の日本生えぬきの言葉が、驅逐されてしまつて居る。尤も、支那文化が日本に這入つて來た爲に、日本が進歩發達したことは申すまでもありませんが、支那の言葉を、餘りに無制限に取入れた爲に、日本言葉の發達が阻止され日本の言葉が驅逐されるやうになりました。是は何とかしなければならぬと云ふ聲が、この頃大分喧ましくなつて、國語尊重と云ふことが、叫ばれるやうになつて居ります。而もこの頃は、その上に、無暗矢鱈に外國語が這入つて來て、是が段々日本語になりつゝある。斯う云ふことの爲に、本來の日本語と云ふものは、次第に影が薄くなつて行くことを必配するのであります。文字は支那のものを借りやうとも、或はローマ字を借りやうとも、それは構はぬ。けれども言葉はどうしても、日本の言葉を尊重して行く、さうして成長發達させて行くことと云ふやうな、心掛がなければならぬ。そこへ行きますと、推古天皇の攝政皇太子の聖德太子は、全く素晴らしい御見識がございました。驚嘆するのであります。聖德太子が御書きになつた三部の經典の註釋も、十七條憲法も、共に漢文であります。しかし日常の言葉まで、支那語を用ひになつたのでありませぬ。支那の唐の時代に出來ました『翰苑』と云ふ本があります。是は三十卷あつたらしいのであります。支那には全然滅びてしまつて、一冊もないのであります。その第三十卷目が日本に一冊傳つて居る。それは太宰府の西高辻男爵家の所藏であります。それを先年、京都帝國大學が複製を致

しまして、それを私も一冊持つて居りますが、その『翰苑』の中に、日本のことが書いてある。倭國——倭と云ふのは即ち日本であるが、聖徳太子が冠位十二階を定められたと云ふことの記事である。「倭國其官有十二等、一曰麻卑兜吉寐、華言大徳」とあつて、即ち冠位十二階の一番上の大徳と云ふのを、之を萬葉假名で以て「麻卑兜吉寐」と記してある、その次へ持つて行つて華言大徳と註してある。即ち、冠位十二階の名稱は、皆日本語で呼ばれたものだと思ふことだ。けは、はつきりして居る。文字は支那のものを借りるが、言葉まで御厄介になりませぬと云ふ、自主的な態度を、はつきりと御示しになつてゐらせられたと云ふことを、この支那の記録に依つて知ることが出来、洵に有難いことだと思ふのであります。斯う云ふ精神で、文字は支那から借りやうとも、言葉は日本の言葉を使ふと云ふやうなことが、ずっと續いて居れば、もつとく、日本の言葉は發達したのであつて、話をするのに、こんなに不便を感じなくても宜いのぢやなかつたかと思ふのであります。もう吾々の話をして居る言葉は、殆ど大部分は支那の言葉、或は支那の言葉に似せて、日本で作つた新支那語でありまして、そのために、純粹日本語が、幼稚未發達の儘に置かれて居ると云ふことを、甚だ悲しまざるを得ないのであります。だから、一つの言葉でも、全然意味の取違をさせられる場合があるのであります。

五 不完全なる國語

是は、二三年前の夏八月であります。私は自分の郷里である越後へ講演に參る爲に、上野の驛へ駈付けた時、一寸時間があつたので、構内をブラ／＼歩いて居つたのであります。さうすると、丁度その年三月にでも、大學を卒業したかと思はれる位の若い男が、二人バツタリ出遭つて、やあ暫らくだつたなあとやり出した。私は別にさう云ふこ

とに、注意した譯ではなかつたんだが、大きな聲を出して話し始めたのでつい耳に這入つたんです。で、つい聞いて居ると、「君は今何をして居る」と斯う一人が聞いたものです、ところが相手の男は、「僕、僕か、僕は今君の前に立つて居る。」一寸面白かつたですなあ。(笑聲)是は「君は今何をして居るか」と譯ねた方の青年の心持は、恐らく、この三月一緒に學校を出て、お互ひに就職運動をやつたが、君は何處かに勤めるやうになつたかと云ふことを聞いた譯でせう。所が意外にも「僕か、僕は今君の前に立つて居る」と云ふ答で、さては、彼氏もまだ就職して居ないのかと、自身も就職して居ないことが、いくらか慰められたやうな心持になつたのでせう、頗る朗かに笑つて居ました。この「今」と云ふ言葉が洵に的確に用ゐられて居る。「今」なんです。所が聞いた方の「今」は、そんな差迫つた「今」ぢやない。「三月以來の今」であります。日本の言葉の今と云ふ意味は、その嚴密な意味に於ては「今」なんであります。「現在」なんでありますから、「今」なら、「俺は君の前に立つて居る」に違ひない。けれども、聞いた方は、君は「あれから今まで」何處かに奉職して居るか、と云ふ意味なんであります。私はその話を聞いて、是は面白いなあ、今の學生は頭がいくなあと感心した。所がさう答へた男が今度は逆に、「さう言ふ君は今何して居るか。」折角今、「今」と云ふ言葉を活かして答へた奴なんだが、やはり聞く時には同じ言葉を使つて、「さう言ふ君は今何して居るか」と聞いたのであります。さうすると相手の答が又實に振つちやつた。「僕か、僕は今呼吸をして居る。」實にどうもよかつたねえ。(笑聲)是位愉快な問答は未だ曾て聞いたことがない。どうも何とも言はれない、間髪を入れずに、「僕か、僕は今呼吸をして居る。」實にお互ひに「今」は呼吸して居るに違ひはない。斯う云つた話は、實に面白いと思つたが、詰り「今」と云ふ日本語の意味が、甚だ内容が曖昧である。「今」と云ふ、吾々や諸君の使つて居る「今」、は本當の現在の「今」なのか、三四年も引くるめての「今」なのか、或は、三月以來八月まで引くるめての今なのか、何だか譯が分らぬ。さう云

ふ風に、日本言葉の未發達の爲に、吾々は時々困らされる、だから、論理的に揚足を取られないやうに話をしようとしても、うっかりすると、日本言葉は不完全であつて、宜い加減に使つて居れば、必ず論理上の破綻を來すやうなところへあり得る。だから尻尾を抑へられぬやうにと、言葉を餘程注意して喋らないと、まるで自分の表現しようと思つたことを、うらはらなことが起つて來る。話をしようと云ふ際には、先づ吾々は、日本言葉の甚だ不十分なものであると云ふことを頭に置いて、不十分な言葉を不十分な言葉の儘表現しないやうに、注意をしなければならぬと思ふのであります。

六 大衆といふ言葉

所で、こゝに「大衆」とか「成人」とか云ふ言葉がありますが、大衆と云ふ言葉に就いて申しますならば、大衆と云ふ言葉は、佛敎語であります。佛敎の方では、摩訶僧伽マハサンガと云ふ言葉を譯して大衆たいしゅうと云つて居ります。是は「大勢の坊さん」と云ふことであります。それで本來の佛敎語から言ふと、今日此處へお集りのあなた方が、若し皆坊さんであれば、大衆と呼んでよいが、さうで無ければ大衆とは呼べぬ譯であります。今、日本語では、民衆、庶民、庶民、庶人、一般大衆、皆同じやうな意味に使つて居るのでありますが、是は果して適當であるかどうかと云ふことを、長い間疑問にして居たのであります。今申したように、佛敎の方で大衆たいしゅうと言へば、佛様を除いた世の中の中の優れた坊さん、賢聖之をハヤシラガ（摩訶僧伽）、大衆と謂ふ、斯うなつて居るのであります。所が、今日日本で、現代語として用ゐて居る大衆と云ふのは、さう云ふ意味ではない。坊さんの中に這入つても宜い譯であります。坊さんだけでなく、一般民衆と云ふ意味、或ひは庶民と云ふやうな意味にも通ずる譯であります。庶民とか民庶、庶人、色々

な言葉があります。庶民とか民庶とか云ふことになりますと、是は無位無官の人と云ふことでありますが、大衆と云ふのは、無位無官の人と云ふやうな意味で用ゐて居るか云ふと、必ずしもさう云ふやうな意味でもないであります。無位無官の人でも、有位有爵の人でも、斯う云ふ所に集つて來れば、大衆と云ふ言葉の中に這入つてしまふ。以前、『大衆』と云ふ雑誌を出すに付て、「大衆」と云ふ名前が宜いか悪いかといふことを、私の所へ照會して來たことがあります。私は、それは宜くない、佛教の方で既に永い間、「大勢の坊さん」と云ふ意味に使つて居るのだから、そんな名前を附けると坊さんの雑誌だと思はれるから、宜くないと云ふことを答へたことがあります。十年前でありますが、そんなことを記憶して居りますが、兎に角大衆と云ふ言葉は、佛教の言葉としては、大勢の坊さんと云ふことである。それでは、支那の方で用ゐた例はないかと云ふと、是は『禮記』にちやんとあるのであつて、それは、今用ゐられて居る大衆と云ふ意味に、能く當筈まるやうに使はれて居る。是は『禮記』の月令篇に、「有司に命じて曰く、土事は作すこと毋れ、慎みて蓋を發くこと毋れ、室屋を發き及び大衆を起すこと毋れ、以てその閉を固くせよ」と、斯うあつて、此處で言ふ「大衆」は、大勢の人間と云ふ意味に用ゐられて居る。だから現代語の「大衆」の典故は此處にあると、さう言へば筋は通るであります。日本で大衆と云ふ言葉を最も多く用ゐて居るのは佛教關係であります。且つ、それは「大勢の坊さん」以外には用ゐて居ないのであります。斯う云ふやうなことを頭に置いて、現代語で用ゐて居るのは、大勢の人間と云ふ意味だと、そこまではつきりして居つて、大衆と云ふ言葉を用ゐるならば是は無論差支へないのであります。唯意味なく、大衆々々と使つて居ると、それは大勢の坊さんぢやないかと云ふやうなことを言はれると、グツと行詰ると云ふやうなことが起つて、大衆に向つて、聊か不用意の誇りを免れないと思ふのであります。

七 成人とは何ぞや

尙ほ、此處にある「成人」でありますが、是は、外國語を飛譯したのではないかと思ふのであります。成人と云ふ言葉も、支那には古くから用ゐられて居るのであります。一體成人と云ふのを、心理學なんかの方で、どう云ふ風に取扱つて居るかと思はれますと、人間が子供から段々と成長發達して行くその順序を、凡そ四つに分けて、幼年期、少年期、青年期、成人期こんな風に分つて居りますが、青年期は、一般に青年團などでは、二十五歳までとなつて居りますから、成人期は、二十五歳を卒業して、二十六歳から成人と言つても宜いものだと、こんな風なことにも言へると思ふのであります。それでこの中には、壯年期老年期と云ふやうなものまでも、含まれるのでありますから、成人期と云ふのは、一番範圍が廣くなつて行くのであります。この成人は、心身が全く發達して、理解力もあれば、反省する力もある、實行力もあり、完全な一人前の人間と言はなければならぬ。それが即ち成人である。即ち人間一人前として、出来上つた人間と云ふことになります。この成人と云ふ言葉は、何處に典故があるかと言ふと、是は『論語』の憲問第十四にある。それは「子路問成人。子曰、若武仲弑之知。公綽之不欲。下莊子之勇。冉求之藝。文之禮樂。亦可_レ以爲成人_一矣。」と斯うなつて居る。即ち知識が有つて、欲が無くて、勇氣があつて、藝に通じて居るといふ、この四つものを併せて、それを文るに、禮樂を以てすると云ふ位の人間ならば、それを始めて成人と云ふことが出来るといふのであります。斯う云ふことになつては、大變やかましくなるのであります。學德兼備の人でなければ、成とは言へない。あなた方も、年齢の上になつては、成人に入りませうが、果して斯う云ふ條件に當嵌まるかどうかと云ふと——當嵌つて居る方が多いでありませうが——多いどころでない、皆さうでありませうが、(笑聲)け

れども、自ら省みて、少しく極りの悪いと云ふ氣持がないでありませうか。學徳兼備完全の人、之を成人と謂ふと云ふのでありますが、孔子様も、ちよいと後で以て、それは、吾々の理想はさうなんだが、「今之成人者何必然。」（今之成人者何必然。）と言うて居るのであります。此處であなただ方も、ホッと一息する譯であります。（滿場笑聲）今の成人とは、「見^テ利^ヲ思^フ義^ヲ見^テ危^ヲ授^ケ命^ヲ。久^ク要^ス不^レ志^シ平^生之^言。」亦^可以^爲成人^一矣。」（亦可以爲成人一矣。）お互ひ同士の間で、利を見ては義を思ふ。義を見てせざるは勇なきなり。君子は義、小人は利。論語の中で屢々言つて居りますが、利を見た時に、不正なものであるか、正しいものであるかと云ふことを考へる力、主人危き時、或は自分の君國の爲には、命を棄てる勇氣、又平常約束したことは必ず守る、斯う云ふやうなことをやれるならば、以て成人と言ふことが出来るといふのであります。こゝらになるとあなた方も、それならやれさうたと、お考へになるでせうが、斯う云つたやうな者が、孔子時代の成人であります。然らば、今の世に言ふ成人と云ふのは、一體どう云ふ所を言ふのであるか。成人教育とか云ふやうなことを、盛に言はれて居るのでありますが、どうも、教育されなければならぬ成人と云ふのは、言葉の上にて、非常な矛盾が出て来る。出来上つた人間なんでありますから、教育なんかする必要はないのであります。文部省初め、成人教育、成人講座なんと云ふのをやつて居る。今日のこの講習會は、是は特別の催しであるから、別でありますけれども、兎に角、成人が教育を受けなければならぬと云ふことは、どうもその言葉の上に於て、非常に矛盾感するのであります。れども、是は所謂年齢の上から見た成人、と云ふことで解釋しなければならぬ。年齢の上から申しますならば、二十六歳以上は成人で、實は八十になつても馬鹿な者は馬鹿、教育の無い者は、教育の無い者で、教育の必要を感じる者が、男もあれば女もあると云ふやうなことで、今日言ふ所の成人と云ふ者は、必ずしも、孔子時代の成人と云ふ物差を以て、決定する譯にも行かぬのであります。

八 教育を必要とする成人

今日の謂はゆる成人と云ふのは、どうも、年齢の上で決めるの外、仕様がないうちやないか。所が、年齢の上で、二十六歳以上の成人の中で、全然教育を必要としない人もあるから、さう云ふ者は、成人講座にも出て来ないと云ふことになる。それで、成人講座に集まつて居る人々は、教育を必要とする程度の人間だと斯う考へてでなければ、話は出来ないうことになる。自分よりは優れた者が居るのぢやないか、自分の話なんか聞いて、何とか言はれはしないかと云ふやうなことを考へて居つたんぢや、氣が遅れて話が出来なくなつてしまふから、大衆と云ふものが、それが皆成人であつても、その成人は、教育を必要とする程度の成人が、そこに澤山集まつて居るのだ、斯う云ふやうな氣持で話をしなければ、氣遅れがして話させぬ。即ち成人と云ふ言葉も、極めて曖昧な意味で用ゐられて居るのであるが、教養のある成人もあるし、教養の無い成人もあるが、前提として、その教養の不足の成人、或は一度は教育を完全にした者であるが、段々色が褪せてしまつて、色揚げしなければならぬ成人、さう云ふやうな者を目安にして教育をするのだと、斯う考へるのであります。母の再教育、親爺教育など、云ふ言葉も用ゐられるやうになつて來たのは、結局その爲めであつて、一度は完全な成人になつたが、年経るに従つて、垢が附いて垢がたまつたりしますからその埃を拂つたり、垢を落したりするのが即ち成人教育、或は親爺教育、母の再教育であると、こんなことが言へるのではないかと思ふ。即ち文字通りに、成人と云ふのは出来上つた者、一通り出来上つた者、けれども尙ほ、何處かに足らぬ所が出て來て、その足らぬ所を埋めてやる、そこに成人に向つて話をする必要があるのだ、斯う考へなければなりません。

だから、今言ふ通り、一人々々調べると云ふと、中には漢學の方面では實に立派な漢學者も居るだらうし、國學の大家も居るだらう。或は又、佛敎の専門の學者も居るだらう。軍人も居るだらう。實業家の大成した人も居るだらう。色々居るだらう。けれども、假令さう云ふ人でも、此處に大衆として纏まつて來た時には、之を皆、教育を必要とする所の成人、色揚げを必要とする所の成人と、斯う考へて、それを、佛敎の大家が居るから、佛敎の話なんかうつかり出來ない、或は漢學の専門家が居るから、漢學の話はうつかり出來ない、國學の權威者が居るから、國學の話が出來ない、政治家が居るから、政治の話はうつかり出來ないと云ふことになつたら、それこそ、何も話が出來なくなつてしまふ。だから、さう云ふやうな人は、一つの事には卓越して居るかも知れないけれども、外の方面に於ては教育を必要とする成人だ。と斯う考へて、少し地ならしをしてしまつて、皆教育を必要とする成人だ、この位に考へて話をしなければ、迎も吾々は大勢の人々を前にして、話なんか出來ないのでありますから、斯う云ふ大膽さを持つ必要があると思ふのであります。唯々色々な専門家が居るのだから、話をして居る時に、直ぐそれ等の人々に、揚足を取られるやうな、不用意な話をしないやうにしなければならぬ。佛敎の言葉を間違へて讀んだと云ふやうなひとつの爲めに、外の人は氣が附かなくても、佛敎に通じて居る人からは、その人は信用を失つてしまふ。漢學のことで間違つたことを言へば、漢學者からは、無學な奴だと思はれて、その人の話全體を、非常に詰らぬ話に取り取られしまふ虞れがあるから、色々な權威者の居ることを、恐れるには當らぬけれども、間違つたことを言つて、揚足を取られると云ふやうな、不用意なこととはしないと云ふ、心掛だけは必要なものだと思へます。

九 一 ツ 穴 の 狐

いつも大内青嶺先生に聞かされたことは、君等は話をする時に、どんな場合にも、決してむづかしく話をしてはいけない、むづかしい話をして宜い人が居つても、さう云ふ人を目標にして、面白いむづかしいことを言ふと、大多數の聴衆は困つてしまふ。だから、さう云ふ専門的な偉い人が居つても構はぬから、必ず大多數の人の、諒解し得る程度の、話をするやうに心掛ける。早い話がこわ飯だな、こわ飯の好きな人の胃の腑が強い。胃の腑の強い人でないと消化が出来ない。だから一般の人々が、皆こわ飯を出されたんでは、相當苦しむだらう。けれども、お粥ならば、胃の腑の強い人にも弱い人にも、決して困るといふ感じを起す氣遣ひはない。だから、大衆を目標に話をする時には、こわ飯流の話をしなくて、お粥式の話が成功するのだ。——斯う云ふことを言はれました。洵に一代の雄辯家、話術家として、明治時代、第一人者と許された人だけに、流石に良いことを教へて呉れたものと感心致します。話の調子を上げてしまふと、大多數の者が困つてしまふが、大多數の者の都合の好い話をすれば、そこに集まつた全部の人が、決してそれを、詰らないから聴かないと云つたやうなことにはならぬものだ。だから、何處に目標を置くかと言へば、先づ中以下の所を標準にして話をする、さうさへするならば、必ず皆がそれを聞いて呉れるものだと思います。今は故人であります、東本願寺派の説教者として有名な粟津義圭と云ふ人がありましたが、亦同じやうなことを言つて居ります。「座に先輩あるを、虎狼の如く恐るゝは以ての外なり、同じ穴の狐と心得べし。」(笑聲)實に名言だと思ひました。同じ穴の狐が居るのだと、斯う考へてやれば、平氣で話が出来る譯でせう。

十 冒頭の一句

講演會等で、演壇に立ちまして、一番最初に發する冒頭の一句と申しますが、冒頭の一句に依つて、全體の出來不

出来を招くといふやうなことも、あるやうであります。又冒頭の一句で、聴衆が食付いて来るか、離れてしまふかといふやうなことも、あるやうであります。これは、文章を書きましても、矢張りさうであります。冒頭の一句といふものが、中々力強いものであつて、文章を稽古する時にも冒頭といふことを、非常に喧しく言ふのでありますが、それは、講演でも演説でも、同じだと思ひます。私共の青年時代の、所謂演説の冒頭といふものは、必ず「諸君よ諸君」と言つたものです。右の手を前へ出して、左から右へ、聴衆の頭を撫でるやうな工合に致しまして「諸君よ諸君」と言つたのです。けれども、今あんなことをやると、少し氣が變じやないかと思はれます。併しその當時は、さうやらなければ演説にならなかつた。演説といふものは、「諸君よ諸君」と言ふことに決まつて居つたが、それが此の頃は、全く、誰もやらないやうになつてしまつた。場合に依ると「諸君」かう言つて出る人もあります。演説の種類にも依りますけれども、今ではもう「諸君」と呼び掛けなくても、差支ない程聴く人が、講演とか演説といふものに馴れて來て居る、といふこともあると思ひます。それから、演説をする時に、何となくザワ／＼して、中々聴衆の氣持が、話を聴くといふ所へ集中して來ない場合には、どうしたら宜いか、ザワ／＼した儘で發言しますと、中々落着かない、すつと靜まる迄の間に、相當餘計なことを喋つてしまはなければならぬ。私なんかは、さういふことに就いて、別に特別な研究をした譯でも何でもないのでありますが、どうも演壇に立ちまして、すつと一渡り傍聴人を見渡して、さうして聴衆が皆、自分の顔を見て居るなと思つた所で口を開く、こんなやうなことも、一つの方法ではないかと思ひます。併しそれが、必ずしも、唯一の方法ではない、外にも色々方法がありませう。

十一 圓朝の語り出し

私が、東京へ来たその年でありましたが、三遊亭圓朝の話を、二度ばかり聞いたのでありますが、圓朝の晩年でありまして、而も寄席ではないので、神田に錦輝館といふ大きな會場でありましたが、その錦輝館で演藝會がありまして、其處へ圓朝が出た。餘り身體の大きくない、萎びた老爺さんが、あの大きな會場の正面にチヨコナンと坐つた。聽衆は滿場立錐の餘地もない程でありましたが、私はあれが有名な圓朝かといふので、ちつと眺めて居つた。すると型の如く湯呑で茶を飲みまして、お辭儀をして語り出した。實にあの大きな場所でありますから、吾々ならば相當大きな聲を出してやらなければ、徹底しないのじやないかと思つた位であるにも拘はらず、圓朝は、自分の前に居る人だけに向つて話をするやうな、優しい聲で口を切つたのであります。所が、口を切る迄は、今申す通り、湯呑を一口飲み乍ら、會場の隅から隅迄ずつて見廻はして居る、聽衆は聽衆で、皆圓朝の方へ心を集中して居る譯です。滿場所謂水を打つた如くでありますから、圓朝が、直ぐ前の人に話をするやうな、小さな聲で話をしたのが、矢張り隅から隅迄ずつと響渡る、流石に名人だといふことを、泌々と感じたのであります。話は、牡丹燈籠の一節でありましたが、どの邊が、今記憶して居りませぬが、實に名人といふものは、あゝいふものかなと、今でも、その時の光景が想起させられるのであります。あの聲で、あの大勢集まつた人々を、自分の方へ引付ける、一つのコツといふものじやないかと思ふのであります。所が、此の頃落語家なんか寄席でやつて居るのは、ちやんと湯呑があつて湯は飲みますが、その飲む態度自身が、既にガサ／＼して居つて、ちつとも纏まりがついて居ない。だから、そのお客は、決して、吾々が、圓朝に對した時のやうに、しつくり致しません。何を言ふかいなア、と言つたやうな、實に軽い氣持で聽いて居る。尤も此頃の寄席のお客なんといふものも、聽下手になつて、實になつて居ない。講談の寄席へ行つても、落語の寄席へ行つても、皆聽下手になつた。隨て話をするものも、藝としてなつて居ないのが多い。江戸前の講談や落語

成人と話すには

が亡びてしまつたようで、本當に悲しくなります。兎に角、話をする方が、聽かせてやるといふのでなく、聽いて戴くといふ態度になつて、迎合主義で受けやうとする、全く昔氣質がなくなつてしまつた、洵に残念であります。それは別として、兎に角、圓朝が、あれだけの人を、すつと自分の所に引付けた。それが別に不思議なことをやつた譯でも何でも無い、唯湯呑を持つて、斯う飲んで居るその態度、唯それだけで皆引付られてしまふ。併しそんなことを吾々が企てゝも、中々出来るのではないのであります。……又演説の場合に、こゝに水がありますけれども、これとても、いきなりゴボク注いで、ガブク飲んでしまつては、それだけを以て、その演説をぶち壊してしまふのぢやないかとさへ思ひます。私は、二時間でも三時間でも、演壇に立つて居る限り、水を飲まぬといふことにして居ります。何故かといふと、これは、人に依つて違ひませうが、水を飲出すと、殊に夏なんか、汗の出る時に水を飲み出したら、幾ら飲んでも足らない、飲めば飲む程飲みたくなる。最初から飲まぬと決心すれば、飲まなくても宜い。飲み出せば、のべつ飲まなければならぬといふことになる。飲まぬと決めて置いて、さうして咽喉の變になるのを押切つてしまふ。押切つてしまへばそれでやつて行ける、と私自身には考へて居ります。これを飲むのに、巧く飲めば、ちよつと面白い飲み方が出来るけれども、眞面目な講演會等ではいけない。今お話した圓朝が、お湯を飲んだといふあの時、私カコップを取つて、圓朝の眞似をしながら飲めば、如何にも自然に水が飲めたのです。又子供なんかを相手にして童話でもやつて居る時は、この水を飲むやうな機會を拵へることが出来ます。義經の話でもして居る時に、「そこで義經水を飲み」といふやうなことを言ふと、子供はワツと笑ふ、随分惡辣な話でありますけれども、そんなことをやつて飲む。けれども、これは、眞面目な講演ではいけない。飲まぬと決めて置けば飲まぬで済むものです。

十二 山室南條兩氏の語り出し

それで、演壇に立つた時に、どうするかといふと、すつと満場を眺めて、何所にどんな人が居るかを見當をつける間に、自分は、深呼吸をやるのであります。さうやつて下つ腹へ力を入れて満場を見る、さうすると皆靜かになる、そしたら話を始める。それから始めの一句でありますが、「諸君」と呼掛けるも一つの方法であります、それが餘り技巧的になつては嫌な氣持がする。山室軍平君が、いつの講演でも、話始めは頗る平明であります。「昨日私の所へかういふ人が参りました」といつたやうな所から始まる、或は「昨日新聞を見ました所が、こんなことがありまして」といつたやうな所から始まる。何でもないすらくと、少しも巧まないで出て來るのであります、それでゐて聴衆は引付けられる。「昨日私の所へ」といふと、何か事件があつたかと、聴衆は非常に關心を有つ、それだけで引付けられる。「昨日の新聞に」といふと、昨日の新聞に何かあつたか、どのことだらうと引付けられる。斯様な山室君の冒頭の出し方といふものは、ちつとも巧んでなくて、巧んだものより、遙に効果的であるといふことを常に感じます。もう亡くなられましたが、大内青巒先生などと並び稱せられる、明治時代の雄辯家でありました南條文雄博士、學者としても、世界的な方でありましたが、この南條先生の話し出し方は、頗る變つて居ました。あんなことを吾々が眞似ても、逆も駄目です。南條先生の講演の始めは、何月何日に、自分は何所でかういふ講演をしたといふ、兎に角三月月位前からの日記でも朗讀して居るやうなことを、長々と話される。美濃の大垣でかういふ話をした。それから名古屋でかういふ話をして、何時何分に汽車に乗つてかうやつた。といふやうなことを詳細に述べたてる、所が、聴衆は飽きてしまふかといふと、却つて引付けられる。あの濃厚で謙遜で、徳の高い南條先生が銀盤上に玉を轉かすやうな美音

で諄々と話し出されると、何でもない下らないことで、吾々がやると、愛想を盡かされるやうなことであるが、それで皆引付けられる。一體先生の演説は、大抵五つか六つしかないものでありまして、甚だ失禮であります。何時でも同じ話をして居る、今日先生は何を話されるか當てゝ見やうか、今日はきつと、六波羅蜜だなどといふと、大抵當つたものです。その位南條先生の話は決つて居る。所が先生は、それをやるのに實に巧みにやる。「私は、この話をするに既に三十餘回、恐らく皆さんの中には、二度も三度も聽かれた方があるかも知れないが、この中に、たつた一人でも聽かない人があればその人が目當ちや。」(笑聲)たつた一人を目當にして、先生は同じ話を平氣でやる、けれども先生の話は全く藝術で、圓朝の牡丹燈籠の話も藝術ですが、南條先生の話は、私共何過も聽いて居るが、何遍聽いても有難いと思ふ。そこ迄行かなければならぬ。落語でも、講談でも、吾々は、何遍聽かされても、それで笑つたり涙を流したりする、だから吾々の話も、同じ話が、そこ迄徹底的にやれるやうにならなければなりません。

所が、私共、同じ話を二度やれと言はれると、逆も氣持が悪い。全然知らぬ所で、例へば、北海道でやつたことを九州でやるといふことになれば、それは平氣でやりますが、同じ東京で、此所でやつて又神田でやるといふと、誰か居やしないかと思ふ。實は今回のこの講演も去年やつたのを其儘やると、去年來て居た人が又此所に来て居れば、彼奴又同じ話をする、といふことになるでせう、さうなるとどうも材料の貧弱さを曝露するといふやうなことで、心外でありますから、自然別なことを考へ来て、お話することになる、實は、此の間も文部省に會があつて、加藤咄堂君と會つて話したのですが、加藤君が、「僕は弱つてしまつた、去年話すだけ話してしまつて、それが速記になつて出て居る、だから、同じことが言へないので、どうも實に弱つた、何か別なことを話さなければならぬが、まだ何を話して宜いか決めて居ない」と言ふのです。そこで私は「君がさういふことを言ふ位だから、僕の辛さを考へて呉れ、恐

らく僕は、今晚徹夜しなければならぬぢやないかと思ふ」といつて、相顧みて大いに笑つたのですが、どうも同じ話をすることが、吾々には何となく氣が咎める。所が、この頃は、随分喋る機會が多いのに、さう何時でも變つた話といふやうには、仕入れが間に合はない、そこで段々圖々しくなつて時々同じ話をするのでありますが、さういふ時は今日は羽織を着替へさせやう、袴だけ替へてやらう、帽子を取り替へよう、下駄を取り替へよう、といふ風に、少しづつ扮装を變へますが、正味は何時でも同じであります。加藤君は、それに對して、かういふことを言つて居る。「豆腐百珍」同じ豆腐でも、料理の仕様では、百色も變つた料理が出来る、話の方でも同じで、豆腐百珍流にやるのだといふことを申して居りますが、しかし、矢張り同じ話を繰返すといふことは、どうも氣が咎めていかぬのであります。けれども、同じ話を何十回となくやつて、それが一つの藝術品といふことになれば、寧ろその話の方が、聽く人に感銘を與へるといふことになると思ひます。是非あの話をして戴きたいといふ注文が出るやうになれば、もう話術としては、堂に入つたものと言つて宜いと思ひます。

それで先づ聽衆を引付けるのには、山室軍平君式に、身上の瑣事から這入つて行くやり方も宜しいし、或は又、相手次第で、釋尊曰く、孔子曰くといふ風に、聖人の言はれた言葉を、のつげに先づ浴せ掛けるといふのも、一つのやり方だと思ひます。これは、眞宗なんかのお説教の時に、お坊さんが「讀題」といつて、親鸞上人の言葉とか、蓮如上人の御文章の一節とかを、暗誦して、それを題にして説教を進めますが、その形と稍々似て居る。釋尊曰く、或は孔子曰く、基督曰く、大聖人の言葉を藉りて、それをバツと浴せ掛けて、聽衆が食付いて來た所で、段々解説して行くといふ、これも一つの方法だと思ひます。

そこで、前に申しましたやうに、演壇に立つて、いきなり、自分の私事について、いろく、こてくと言譯をす

るといふことは、非常にまづいことでもあります。そして、自己宣傳をやるといふことは、更に一層悪い。自分で、日本一と考へて居る或雄辯家が、自己宣傳を長々とやりますが、あれも偶には宜いが、のべつやられては堪らぬと思ひます。先づ吾々が人に話をする時には、率直に聴き手にぶつかつて行く、自分の立場をこてく説明するといふことは最も拙劣といふよりは、愚劣だと思ひます。

十三 話の目的

話の目的は、先づ第一に知らせる、感動せしめる、さうしてそれを實行せしめるにあります。この三段構へでなければ、話をするといふことは、意味をなさないと思ひます。苟も話をするのでありますから必ず自分の話して居ることを、相手に能く諒解せしめる。即ち相手が持つて居ないものを、與へるといふやうな意味にとつて宜いのであります。兎に角、知らせるといふことが、話の目的の一つであります。又折角話をするのでありますから、それに感奮興起せしめる、感動せしめる、感心させるといふやうなことが無ければ、話の効果が擧らないのであります。聴くには聴いたけれども、實に面白くない、詰らない、馬鹿々々しいといふことであつては、これは話をしたといふことが、徒勞になりますから、實に尤もだ、有難かつた、といったやうな、色々な氣持がありませんが、兎に角話をしたこと、それを聴いて感動するといふことを目的の一つとして話をしなければならぬ、といふことは言ふ迄もない。それから最後に實行であります。實行して貰はなければ、これは何の意味も成さない。殊に教育等に關係のある人、或は學校の先生等に於て、その話を聴いたものゝ、實行に現はれて來ないといふことであれば、これは話をしてもしないでも同じだ。分るは分つた。面白かつた。尤もだといふでも、それを實行に移さなければ、これはちつとも話の

効果はない。例へば、學校の生徒に東北の凶作に同情せよといふやうな話をして、東北の人々は、毎日食物が無くて困つて居る、お腹を空かして居る、だから、何とかして食物を送つてやりたい、そこで諸君、君達は、明日のお晝の辨當を廢めたらどうだ。明日お晝の辨當を廢めると、三時頃にはお腹が空いて眼が廻る、その眼の廻るやうな氣持を一つ味はつて呉れないか、成程、東北の人は、こんな氣持で毎日生きて居るのかな、實に辛からうと、斯う思ふと、君達は、東北の人々に、心から同情することが出来る、三度々々、鱈腹御飯を食べて居つて、東北の人は物が無くて困つて居るさうだと云ふても、それは本當の同情にならぬ。だから、君達は、明日お晝の辨當を食べないで居つて呉れ、先生も食べないといふことを言つて、それをちやんと實行させる。幾ら呼掛けても、實行しなければ何にもならない。さういふ風に、話は必ず知らせるといふことゝ、感動させるといふこと、それから實行を要求すること、この三つのものが備はらなければならぬことは、これは申す迄もないことであると思ふのであります。これは心理學の方で、智情意に分けて、この智情意の作用に、びつたり當嵌めて行くといふ論も立つのであります。佛教的に申しますれば、學、心、行とも言へるし、一般的には、學問、道德、宗教といふやうな具合に、取扱つて行くことも出来ると思ひますが、兎に角、知らせる感動せしめる、實行させるといふことが描はなければ、話をした効果がない。だから、吾々は、其所を狙つて話をしなければならぬといふことになるのであります。

十四 話術と宗教

さういふやうな効果を擧げるのには、即ち、話方といふものに就いて、相當苦心しなければならぬことは言ふ迄もない。西洋では、話の方法といふものが、昔から考へられて居るのであります、ギリシヤなど、民論を重んじた

ころから、辯論の方法が發達したが、東洋の方では、專制政治で、倚らしむべし知らしむべからず的に、民論を抑へて居たばかりでなく、道徳的には、「口は禍の門」とか、「沈黙寡言」とか、「守口如瓶」とか、「もの言へば唇寒し秋の風」とか、兎角、議論を抑へるようになって居たために、話術といふものが、特別に研究されて居なかつたのであります。併し、話術は、特別に研究されて居なかつたけれども、話をするこの上手な人は古來決して少なくなないのであります。お釋迦様とか、或は孔子とか、かういふ人々は、話は上手のやうであつたし、殊に雄辯家としては、支那では、蘇秦、張儀といふような人があり、日本でも、日蓮上人、法然上人、親鸞上人といふような人々は、皆話術の妙を得た人々である。どうも東西を通じて、話をするこの上手なといふ側の人は、宗教關係の人に多いといふことだけは、これは、掩ふ可らざる事實だと言つて宜いと思ひます。一體、雄辯術を、英語で、エロキューションと申しますが、又別にオレートリーといふ言葉もあります。これは羅典語のオラトリアといふ言葉が原だと言ふのであります。このオラトリアは、更に羅典語のオラレといふ言葉に淵源して居ります。そのオラレといふ言葉は、祈禱をするといふ意味である。だから、祈禱所を、オラトリウムと言つて居りまして、つまり、雄辯の起源は、宗教的であるといふことが出來ます。即ち美語のオレートリーといふ言葉は、雄辯といふ外に、祈禱堂とか、禮拜堂とかいふ意味に、用ひられて居つて、雄辯といふ言葉の起源と、宗教行事の起源と、言葉の上からは、同一に取扱はれて居ることを考へて成程、雄辯が宗教と密接な關係があるといふことを、面白いことだと考へたのであります。お釋迦様にしても、其他の方にしても、自分の信する所を、一般大衆に宣傳をして、自分の歩いて行く道を、歩かしめて行かうといふのでありますから、これは實に、非常な熱意と眞心と、さうして辯才といふものが、伴はなければならぬといふことは、言ふ迄もないのであります。佛教の方では、富樓那の辯舌とか、或は道生說法頑石點頭とか申して、隨分雄辯家が少くな

い、その石が顯頭したといふ逸話を有つて居る道生といふ坊さんは、支那の東晉の時代の學僧であります。これは佛教の教理になるから、少し面倒になりますが、闍提成佛論、闍提といふのは、サンスクリットのイツセンチカの音譯で、一闍底迦とも書いてありますが、それを縮めて一闍提、それを更に縮めて闍提といつて居りますが、翻譯すると、斷善根とか、信不具足とかいふことになるのでありまして、佛になる資格のないものといふことです。その佛になる資格の無い闍提が成佛するといふことを、闍提成佛といふ、そこでこの道生が、これを説いた爲に、大衆から嫉まれ擯斥されて、平江の虎丘山といふ山に登つて、誰も聴手が無くなつたから、石塊を集めて涅槃經を講じ、この闍提成佛論を説いた。所が、段々説いて行く中に、その群石皆首肯したといふのであります。その位、この道生といふ人は、辯舌に優れて居つた。誠意があつた、熱意があつた、信仰が盛んであつたといふのです。かういふ風に本當に眞心と熱意とを以て、辯舌といふものを巧みに用ひますならば、必ず石のやうなものでさへ、善導するといふこともあり得やう、かういふことで、さういふ點から申しますといふと、宗教家といふものは、大體さういふ傾向を有つて居つたものであつて、釋尊の五十年の説法、基督の山上の垂訓、親鸞上人の絶對他力の信仰、日蓮上人の立正安國の叫び等、畢竟彼等の體驗と信念の迸りであります。

十五　ゼスチユア

さういふ風に、結局人を動かすには、思想と信念、これが確立して居なければ、幾ら技巧が巧いといつても、技巧だけで、人は本當に食付いて來ない、ちよつとは來ても、直ぐ離れる、けれども、思想内容が豊富であつて、さうして眞心、熱意といふものを持つて居りますれば、必ず人はそれに付いて來る。宗教家も、澤山の信者を、自分の周圍

に持ち得るやうになる。であるから、吾々が大勢に向つて話をするにも、矢張り一面に於ては、思想内容が豊富であるといふことを必要とし、同時に熱意を以て、真心を以て説く、これだけの條件を具備しなければならぬといふことは、これは言ふ迄もないことであると思ふのであります。それから、技巧といふことになりますと、ゼスチュア、身振であります。私はこの身振といふことに就いては、實は何も知らないのであります。だから、演壇に立つた恰好が、頗る悪いと、始終言はれて居ります。手の置き所に困る、この両手をどうしたら宜いか分らぬ。だから、こんなことをして見たり、(演壇の上で、左の手を、指を堅てたまゝ軽く置き、右の手をブラリと下げ、待機の状態にして置く。)又かうやつて見たり、(両手を羽織の紐のところまで持つて来て、両方の拇指を袴の紐のところへ挿入し、他の八本の指で下腹部を押へる。)これは私の癖であります。悪いといふことを知り乍ら、知らず識らずかうやる。けれども、私自身は、かうやつて、下腹に力が這入つて居ると、一番氣持が好い。かうやつて居らぬと、下腹の力が抜けてしまふ、だから、私としては、これが癖であつて、又大切な條件であります。それから、洋服を着てこんな恰好でやると、實に不作法に見えます。ズボンのポケットへ両手を突込んで、もじ／＼するといふことは、絶対に慎まなければならぬ。或はこんな恰好で、片手を背中へ背負つてしまふ、さうして右の手だけを使ふといふ形は、非常に好いと思ひますが、私は洋服の方は、若い時學校を卒業して以來着ないのでありますから、和服でそれをやつては恰好がつきません。手のやり場といふものは、一つのゼスチュアとして、最も大切な條件だと思ふが、併し、私自身は、何等自信を有つて居ない。さうして私は、負惜しみを言ふやうだが、實は、ゼスチュアといふものは、餘りそれに苦勞するといふことは、下らないことだと思つて居る。話といふものは、聽かせるものだ、見せるものぢやない。尤も此頃は、世の中の有様も變つて来て、ラヂオが出来てからといふもの、芝居を聽かせ、相撲を聽かせ、野球を聽かせて居る。

だから、講談を見せたり、落語を見せたり、演説を見せたりすることも、當然かも知れないが、演壇に立つて、踊つて居るといふことはいけけない、矢張り話は聴かせるといふところに、重點がなければいけない。そして、ちやんと人が分つて呉れ、感動して呉れ、實行力が伴ふやうにしなければならぬ。そこで又圓朝ですが、圓朝は決して態とらしい身振りをしない。扇子を一本持つて居りますが、普通の落語家のやうに、あんなに無暗に扇子を虐待しない、ちやんと斜に構へて居つて、よく／＼の時でなければ、扇子も働かせない、身體も動かさない、きちんと坐つて居る、あれでもちやんと人は引きつけられる、そこに話術の妙がある、だから、私は、講演なんかには、セスチュアに愛身をやつすといふことは、寧ろ愚なことでないかと思ふのであります。けれども言葉が不完全なのでありますから、形で以て、言葉の足らざるを補ふ場合のあることも言ふ迄もない。天を仰ぐといふ時に上を眺め地に俯すといふ時に下を向くといふことは、型の通りやるも宜いが、それも、自然にやるといふことなら宜いが、天といふ時には、どうしてもかやしななければならぬといふやうに統制して、形だけかうなつて、天といふ時に下を向くといふやうなことは、絶対にあり得ないけれども、丁度此頃の下手なトーキーのやうに、ロバク／＼して居りますけれども、聲と口とは違つて居るあんなやうになると、セスチュアは、寧ろ荷厄介なもので、喋つて居ることゝ、セスチュアと一致しないやうな、とちんかんが起る。ですから、セスチュアは、自然に委せるが一番宜いと思つて居ります。或事柄を説明する時に、例へば二二が四といふ時に、是非四本指を出さなければならぬと覚えて、二二が四とかうやらなければならぬといふことは、これは餘計なことだと思ひます。さうやらなければ、飲込んで呉れない聴衆ならば仕方がないが、何も二二が四と、四本指を出さなくても、言ふだけで分かる筈だと思ひます。だから、さういふ時に、何でも、形で示さなければならぬといふ風に、セスチュアに囚はれるといふことは、寧ろこれは無意義なことだと言ひたい。唯、自然に身

體が動き、手が動き、或は首が上へ向き、下へ向くといふ風に、自然に委せるのが、一番宜いと考へて居ります。

しかし、雄辯學、雄辯法、雄辯術などを、専門に研究した人は、そんなことは言はない。ゼスチュアの重要性といふことを滔々と説きませう。恐らく貴君方の中でも、さうお思ひになる方があるかと思ひますが、私は、それに囚はれない心構へが欲しいと思ひます。ゼスチュアが無くても、人を感動させて居るといふ實例があります。それは、私の知つて居る青年に、一本足の男があります。兩手と片足を汽車で切斷されて、一本足で生活して居る、これは、私の關係して居ります東洋大學の卒業生であります。中山生堂といつて、今は新宿の帝國館の、活動辯士となつてやつて居ります。この人は今も申したように、六つの時に汽車に轢かれて、兩手片足を奪はれて、今一本足であります。この男の身の上話をして居ると、それだけで、二時間位かゝるから、今は省略しますが、この男は、兩手片足が無いからゼスチュアが出来ない。併し、彼が、本當に眞剣に、自分の母が、自分を育て、呉れたといふ、その母性愛を語る時は、彼も泣きますし、聽いて居るものも、皆感動して泣いてしまふ。何等のゼスチュアを用ひないけれども、ゼスチュアが無くても、人間眞心があつて話をすれば、必ず人は感動するものだといふことを、この中山生堂君のことからも、言ひ得るのであります。けれども、私は、必ずしも、ゼスチュアを排斥するものではありませぬ。自然に出るゼスチュアは、洵に好いものだが、併しゼスチュアに囚はれてはいかぬ。何故ならば、話は聽かせるものであつて見せるものでないといふ所に、原則を有つて居るのだから、斯う申上げて置くのであります。

十六 逆 手

それから話をする場合に、逆手を用ひることの効果、勿論それは、正道ではありませんが、時に頗る効果がありま

す。私は、時々禁酒の話をするのでありますが、若い人も年寄も居る所で、酒を飲んではいかぬと、盛んに酒の害を説く。所が、六十以上になつて、頭の禿げたものは機嫌が悪い、必ず寢酒を飲まなければならぬといふものが相當居る。さういふ時に、眞向から禁酒論をやると氣に入らぬ。ぶつ／＼言ふ。私はさういふ場合にかう言ふ。「さうは言ふものゝ、お集りの老人方に向つて、酒を廢めよといふことを言はうとするのではない、貴君方は、どうしても酒を飲まなれば、生きて居れぬといふのだから、さういふ人は、成る可く強い酒を、成る可く澤山召上れ、さうして成る可く早く片付いて貰ひたい」(笑聲) 實にどうも、この位亂暴な言ひ方はありません。お前なんかは、早く死んでしまへといふことを、眞向から言つて居るのですから、普通の場合、誰だつて怒ります、併し成る可く強い酒を成る可く澤山召上れと老人達の氣持をほぐして置いて、さうして成る可く早く片付いて呉れと、この成るべくといふ言葉を、重ねて用ひるとともに、面白味があつて、怒りたくても怒れない。「後はアルコール氣の無い青年が、萬事引受けて参りますから御心配はなくお片付け下さい。」これで、満場の空氣が、すつかり朗かになつてしまふ。さうして此方の言はうと思ふところが、徹底的に言へる、かういふ風な話の仕方が、相當有效なものだと考へて居ります。所が、お寺へ参りますと、一番困るのがお婆さんです。淺草の本願寺や築地の本願寺等へ参詣して、一生懸命南無阿彌陀佛々々々々と、お説教の一節毎に感動して、南無阿彌陀佛々々々々と唱へますが、お説教の方は、あれで、やりよいのさうですが、吾々の話の途中に、あれを投込まれては、とてもやりきれない、その上に、婆さん達はよく居眠りをする、眠つて居ながら、時々思ひ出したように、南無阿彌陀佛々々々々と唱へる、せめて眠らせないようにだけはしたいものだと思ひまして、私はいきなり、婆さん達にかういふのです「婆さん達位、始末の悪いものはない、私に取つて婆さん達は、苦手だ。」とかう言ひますと、何を言ふのかと、こちらの顔を見上げます。そこで、「一體、婆さんは、人

生の卒業者だ、何も彼もよく承知して居る、何も彼もよく承知して居るから、人の話がすぐわかる。「あの話は、始めがあ、で、中程がかうで、結末がどうなるのだ。」と、結末までが、ちやんとわかつて居る。まだ聴かないうちに、結末までわかつて居るから、ツイ居眠りが出る。眠つて居る人に話をする位、骨の折れることはない、だから、婆さんは、私の苦手だ。」と、こんな風に申しますと、婆さん達、すっかり目がさめてしまふ。これは、頭から叱るやうであるけれども、そこに反省を促す、といふ意義もあつて、効果的である。だから、頭から荒つばい言葉を吹掛けるといふことも、場合に依つては、非常に宜い、所がこんな調子で、在郷軍人が何か集つて居る所でやつてごらんさい、それこそ歸りが危ない。(笑聲)だから謂はゆる、「人見て法を説く」でなければならませぬ。

先達つて、文部大臣が、宗教關係者を官邸に招待して、色々懇談したことがある。その時、私も招かれて行つたのでありますが、大臣から、何でも宜いから、御腹藏なく言つて貰ひたいといふ挨拶がありました。僕も、何か言はねばならぬ順序となつたのでありますが、佛教や神道の人が、「宗教法」制定の要望をした後ですから、何かそれについて、一つ、釘をさしてやらうと考へたのですが、眞向からやれば、議論になつて、折角の招待會の空氣が、面白くなる。これは、お客たるものゝ注意しなければならぬ點であります。そこで、私は、「只今、大臣から、腹藏なく話せといふことでありましたが、若しこゝで、私が、私の思つて居ることを、腹藏なくぶちまけたら、アチラコチラに差障りが出来て、いろ／＼御迷惑をかけることゝなるかも知れませぬから、腹藏の無い話は差控へますが、例へば、只今、お話の「宗教法」であります、宗教といふものは、法律の支配なんか受くべきものではない、帝國憲法第二十八條に於て、宗教の自由が保障されて居る、あれ以上、法律なんか作つて、宗教の本質に觸れるといふことをするならば、私は絶対に反對である、若し宗教團體を取締る爲に、法律を設けるのならば、吾々は宗教團體に附屬して居な

いの中からそれについて、彼此申す筋はない、しかし、事苟も、宗教の本質に觸れて來るといふやうな、法律を作るといふことならば、眞向から反對する、と言つたやうに、腹藏のないところを申し上げればこれだけでも相當に、當り障りの出來ることを恐れますから、今日は、腹藏のないところを申上げることが差控へます。』と申したのであるが實は、これで腹藏の無い話をしてしまつたのである、腹藏のない話、十分にやつてしまつてから、だから腹藏の無い話は致しませぬといふところに、逆手は妙味があると思ひます。(笑聲)けれども、これを濫用するといふと、大變な間違ひが起つて來るといふことも亦考へなければならぬ。こんな風に、成人に話をするにも、お婆さんに話すにも、さういふ一種の逆手を用ひて目的を達するといふ、さういふ用意も場合に依つては必要であると思ひます。

十七 引用語を忘れた時

それから、演説の途中で、引用する詩とか歌とか格言とかを、忘れることが時々があります。古人の歌の上の句だけ出て、下の句を忘れた場合、焦ればあせる程出來ない、それが、古人の詩とか歌とかならば兎も角、「畏くも明治天皇の御製に」と言ひ出して、上の句だけは滞りなく述べられたが、下の句が出ないといふことになる、大變なことになる。だから、古人の詩とか格言を引用する場合に、まづ、その人の名を言はず、歌や詩の方を先きにして、若し半分しか出なかつたらあとの半分は、意味でつゞけて「といふやうな意味の歌がありました」とやれば、無難に濟む、先達の才子恃才愚守愚、少年才子不如愚諸君他年成業後、才子不才愚不愚といふ詩を引用したのですが、どうしても、第二句目が出て來ないので、チョットまごついたのですが、仕方なしに「一句を忘れたが」とやつて、話を進めました、それから、聽取者の中から、その一句を、わざわざはがきで知らせて呉れた人が、幾人もありまして、

にはならない。兎も角、御製や御歌を話の中に拜借するといふことは、十二分の注意を拂つて、かりそめにも、不敬にわたらぬよう、注意しなければなりません。

十八 あと十分延長といふ時

話をして居る時に、ちよつと名刺か何か持つて来る、後の辯士が見えませぬから、十分延して下さい、かういふ時に、諸君方は、どういふことをなさるか知りませぬが、これは、大衆の前にして話をする時に、よく起ることであります。或は、又後の辯士が澤山居りますから、もう宜い位に止めて下さいといふことがある。話を途中で止めるといふことは、無理だと思つても、さういふことに際會することがあります。けれども、話を途中で止めることは、可能であります、もう十分と言はれた時に、どうするか、そこで吾々は、話の備荒貯蓄を持つて居なければならぬ。身代ありたけ出すといふと、東北のやうに、直ぐ行詰つてしまふ、昔のやうに、郷倉があつて、そこへ他日の備へが貯へてあれば、一年位の不作は、何でもない。吾々が、演壇に立つた場合も、丁度それと同じで、序論はかう、本論はかう、結論はかう、もう何も言ふことのなくなつた時に、もう十分と言はれた場合に、貯蓄がないと、直ぐ行詰つてしまふ。そこで吾々は、何所からでも、すぐ役に立つやうな、備荒貯蓄を持つて居なければならぬ。前に申上げた南條先生、大内先生などは、この備荒貯蓄を持つて居られた。それで「南條窮して梵語を出し、大内窮して勅語を出す」と言はれたものです。南條先生は、若し今のやうな場合には、必ずサンスクリットを出す、これは先生は、世界的のサンスクリットの學者でありますから、サンスクリットならば、何日でも話が出来来る。だから、先生は、何かといふと、サンスクリットです。又大内先生は、教育勅語に對しては、實に造詣が深かつた。又教育勅語の御言葉は、どこ

へ持つて行つても話になる。其のどこか掴めば宜い。結論に到達して居つても、教育勅語の御言葉を拜借さへすればどこでも、十分や二十分はやれる。それで「南條窮して梵語を出し、大内窮して勅語を出す」といふ言葉が、吾々の間に語り合はされたものであります。かういふ備荒貯蓄を持つて居りさへすれば、それは何時何所で、どんなことに間違つても、少しもまごつくことはありません。不斷さういふ心懸があれば、もう十分と言はれても、木に竹を接いだやうな話をせずに、すら／＼と巧く話が纏まつて来る。これは相當その道の老巧者は、皆心懸て置くことであります。が、さういふ備荒貯蓄を持つて演壇に立たぬと、非常の場合に、直ぐ陥落するといふ虞があります。

十九 修辭について

總て話は、平談俗話といふのが、一番好いのでありますが、どうも矢張り、幾らか言葉を飾るといふ必要もあります。併し、講演でも演説でも、餘り美辭麗句を連ねるといふことは、感心し得ぬのであります。或陸軍大臣の如きは盛んに美辭麗句を列ねたものですが、そのために、貴族院の問題になりまして、陸相の演説は、美辭麗句の連続であつて、その内容はどこにあるかと詰め寄せられたことがあつたことを、記憶して居りますが、どうも議會で演説をする場合に、美辭麗句が何の必要か、イヤ一般の講演の場合でも、美辭麗句だけ連ねて、それで宜いものと考へるならばそれは非常な間違ひであります。例へば、年の若い綺麗な娘さんと言へば足るのに、年は二八か二九からぬ、花の顔容月の眉……そんな美辭麗句なんか、連ねる必要はない、こんなことも一例だと思ひます。「我に兄弟なし、汝の父は、我が父の子なり。」こんなやゝこしい修辭を用ひては、どうも分らぬ。「お前は俺の子だ」と言へば、それでよいのに、俺には兄弟が無い、お前の親父は俺の親父の子だ、さういふ廻りくどいことを言つて、それが修辭の妙を得たも

のだと思ふならば、實に噴飯に堪へない。此の頃、學者の書いた論文を見ますと、えてさういふことが多い。直接言へば分ることを、ぐる／＼廻つてやつて居るから、中々分らぬのであります。

二十 術語の讀みくせ

それから、文字の讀方、或は言葉の發音であります。これは實に、此所に材料が澤山集めてありますから、これを皆さんに、お土産に持つて歸つて貰ひたいと思つて思りましたが、……例へば、最近私は、或縣へ講演に参りました時に、學務部長が、國民精神作興に關する詔書を捧讀した。其時に「憂悚交々至レリ」といふ所を「憂悚交々至レリ」と讀み、「或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル」を「前緒ヲ失墜」と讀みましたが、どうも困つたものだと思ひました。又、ラヂオの放送を聽いて居りましたが、堂々たる大家、名家が、どうもだらしない言葉を使つて居るのに驚きます。土音や方言は寧ろ愛嬌があつて面白いこともありませんが、讀みくせも知らずに、勝手に讀んだり、發音が、全然、傳統を無視したものであつたり、實に噴飯に堪へないことを言つて居る。一々名前を擧げて、誰がこう言つた、彼がどう言つたと申し上げると、頗る興味深いものですが、そうしてその數が、こんなにも澤山あるのですが、もう十二時を過ぐることに已に十五分、これ以上の延長は、御迷惑でせうから、ほんの見本として、一つ二つ申し上げて、あとは他日のお楽しみにお願い致して置きます。

『阿含經』には、四阿含と申しまして、長阿含、中阿含、雜阿含、增一阿含とがあります。長阿含はデウアゴン、雜阿含はゾウアゴンと發言するのでありますのを、チウアゴン、ザツアゴンと發言して、平氣で阿含經の講話をした人がありますが、一塵の佛教學者だと思はれて居るのさへ、これですから、誠に心細い譯であります。如何に大

衆にわからせさへすればよいからと言つても、専門語だけは、正しく發音しなければならぬ位は、心得てほしいと思ひます。例へば、經といふ字は、場合に依つては發音が違つて「キヤウ」ともなれば、「ギヤウ」ともなり、「ケイ」ともなり、「キン」ともなり、「ギン」ともなる、又本質的といふ時の質でありますが、これも、私の知つて居る範圍では「シツ」「シチ」「チ」「ジチ」「ゼツ」など發音します、唯識では、本質をホンゼツと讀みますが、人質といふ時は「チ」といふ、日本語にして「ヒトジチ」であるが、漢文流では「チ」と讀む可きものだといふ位は心得て居なければならぬ筈だが、それが中々行はれて居ない。和尚は、禪宗の言葉でありますから、一般大衆は「オシヨ」と讀んでも宜いが、真言では「クワシヨ」と言ふ。そんなやうなことは、専門的になりますから、一般の人は知らなくても差支ないといへば差支ないが、矢張りこれも専門の立場を尊重して、成る可く間違はぬやうに、發音するといふ心懸がなくてはならないと思ふのであります。こんな専門的のことでなく、もつと通俗の例で、澤山集めてあるのであります。どうも時間のないことを残念に思ひます。殊に、また、演題の選び方演壇に立つ時の心得、演説の組立て方、原稿を作ることの可否及びその活用法、壇上の作法、聲の練習、彌次に對する心得、司會者の役割等、お話ししたいことは、多々あります。れで御免蒙ります。(拍手)

附言、これは、第二回話術講習會に於ける、講話の速記ですが、一讀して、さても、つまらぬことを喋つたものかなと、我ながら、アインがつかはてました。こんなものを、印刷して配る位なら、昨年、第一回話術講習會の時の講話を速記して貰つて、出した方が、どれだけよかつたか、知れないと思ひます。しかし、昨年は、それさへ印刷するのが氣恥しくて、堅く／＼速記することを謝絶したのであります。従つて、この速記も印刷して公にすることは、どうか勘辨して貰ひたいと、泣くようにして頼んだのですが、許されぬ。まゝよ、勝手にせいと言つたやうな、捨て鉢な氣持でこれだけのことを、書かせて貰ひます。

(曙町の廣長舌莊にて、高島米峰)

